

令和 2 年 6 月 5 日現在

機関番号：33910

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K17098

研究課題名(和文) 高橋亀吉の経済思想研究

研究課題名(英文) Takahashi Kamekichi's Economic Thought

研究代表者

影浦 順子 (KAGEURA, Junko)

中部大学・現代教育学部・助教

研究者番号：20704802

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本で最初の経済評論家・高橋亀吉の初期の経済思想について、一次史料に基づき分析したものである。これまでの高橋研究の多くは、高橋の政策提言(新平価金解禁論、プチ帝国主義論、経済統制論、金融証券論など)を断片的に論じるとどまり、その背景にある高橋独自の日本近代化論、日本資本主義論の解明にまでは至っていなかった。本研究は、高橋の本格的な研究となることを目指し、両世界大戦期において、高橋が中小工業と農業の再編を起点に、日本資本主義の根本的な改変を提起していたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本経済史・思想史において多大な影響力をもった日本マルクス主義と同様に、高橋も日本資本主義の後進性・脆弱性を厳しく指摘した人物の一人であった。日本資本主義の構造を静的に分析した際、これを開発独裁型の上からの革命による後発資本主義と認識し、下からの革命なくしては維持・発展できないと考えた点などは、マルクス主義の思想とよく似ていたと言える。しかし高橋は、暴力的な社会主義革命を必須とするマルクス主義とは異なり、産業組合や経済統制などの内部変革をつうじて日本資本主義の改良は可能であると考えた。本研究ではこうした高橋の独自の立ち位置を、具体的な政策提言のなかで明らかにした。

研究成果の概要(英文)： This research project was an analysis of the early economic thought of Japan's first economic critic Kamekichi Takahashi, based on primary historical source materials. Most of the research on Takahashi up to this point had been limited to discussing his policy recommendations (theories on lifting the gold embargo at a new parity value, petite imperialism theories, economic control theories, financial securities theories, etc.) in a fragmentary manner without clarifying their background conditions, such as Takahashi's original theories on Japan's modernization and Japanese capitalism. With the goal of becoming a full-scale study on Kamekichi Takahashi, this research project clearly revealed that during the time periods of both World Wars, Takahashi had presented ideas for fundamental reforms of Japanese capitalism, starting from the restructuring of small- to medium-scale industries and agriculture.

研究分野：日本経済史、経済思想史

キーワード：高橋亀吉 日本資本主義論 新平価金解禁論 プチ帝国主義論 中小工業論 農業経済論

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本で最初の経済評論家・高橋亀吉(1891-1977)は、戦前戦後の日本経済史の重大な局面において先駆的な予見と評論を行った人物である。また活動の場を、社会運動や歴史研究にまで広げるなど、日本経済史・思想史の歩みを基礎づけた巨星の一人であった。しかし、これまでの高橋研究は、高橋が大東亜共栄圏を構想した革新官僚とつながっていた経緯などから、既成の研究史から正確な評価を阻まれていた。またジャーナリズムにおいても政策提言の断片的な評価にとどまるなど、その知名度と歴史意義に反して、本格的な研究が着手されていない状況にあった。そのため時代の変化に応じて評論を行う高橋に対し、論理の一貫性のなさを指摘するなど誤解が生じていた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、高橋研究の長年の空白を埋める基礎的研究となることを目指し、高橋の初期の経済思想を時系列に沿って分析することにある。生涯、アカデミズムと距離を置き、在野であることに拘り続けた高橋は、欧米の経済学を機械的に日本に適用する危険性を指摘し、日本資本主義の生成・発展過程を経験的・実証的に分析する重要性を説いた。その姿勢と思想は、同時代の文脈においては主流とならなかった。しかし傍流であった高橋は、高度経済成長論を基礎づけた下村治が高橋から徹底的な影響を受けていたように、日本資本主義を実際に改変し、国民経済を高度化させる経済理論を戦前からすでに準備していたと言える。本研究では、こうした高橋の独自の立ち位置を、具体的な政策提言のなかで明らかにする。

具体的な目的は以下のふたつである。

- (1) 一次史料をもとに、第一次世界大戦後、戦中期、に高橋が展開した日本経済評論やマクロ経済政策論についてまとめ、高橋独自の日本資本主義論を分析する。
- (2) (1)の基礎的研究の成果をもとに、相互の思想形成に大きな影響を与えあった同時代の経済思想である日本マルクス主義の社会主義論、在野の経済ジャーナリズムの経済的自由主義論、革新官僚の日本経済再編論、などと比較研究を行う。そのなかで、1970年代中期ごろまで、日本のアカデミズムの共通関心であった日本の近代化を根源的に問い直す視点や、既成の経済学の枠組みにとらわれず現実から論理を組み立てる日本経済評論の特徴に光をあてる。

3. 研究の方法

具体的な研究方法は、以下である。

- (1) 高橋の経済思想を時系列に沿って体系化する研究においては、一次史料の読解を基本方法とする。第一次世界大戦後の高橋の問題提起(新平価金解禁論、プチ・帝国主義論など)については、博士論文「高橋亀吉の経済思想研究-第一次世界大戦後から世界恐慌まで-」の内容をもとに再検討する。なかでも高橋が重視した中小工業と農業経済の再編内容について議論を深める。戦中の問題提起(統制経済論、植民地論など)については、高橋の戦中の代表的著作『日本経済統制論-産業を中心として見たる』『統制金融と自由金融』『東亜建設戦と財政経済の再編成』『共栄圏経済建設論』などを対象として史料分析を行う。

- (2) 高橋の経済思想を外部の思想から客観視する研究においては、高橋と似た日本経済論を展開した日本マルクス主義や経済的自由主義の論客に焦点をあてて、高橋との共通性・差異性を比較分析する方法をとる。この方法から、高橋が、日本資本主義の現状分析と再編方法について、同時代の経済思想家たちとどのような問題を共有していたのかを明らかにする。

4. 研究成果

上記の研究方法から、以下の成果を得た。

- (1) 高橋の思想的出発となる新平価金解禁論とプチ帝国主義論の内容を一次史料から再検討した。その結果、高橋が、大正期に台頭する企業家・実業家など新中間層の積極的な市場経済への参加を重視していたこと、円安の為替相場の設定と農業経済および中小工業の再編を起点に、日本資本主義の体制内変革を目指していたことを明らかにした。そして、その政策主体を、20年代半ばまでは、下からの革命を主導していた農民運動に、世界恐慌後は、次第に上からの革命を遂行できる革新官僚へと求めた事実を得た。この成果は、「高橋亀吉の経済思想」として、経済学史研究会にて報告した。

- (2) 高橋の戦中期における統制経済論と植民地経済論について、国立国会図書館の憲政資料室に保管されている高橋文庫を中心に資料調査を行った。その結果、満州経営に関しては、星野直樹からの依頼を受け、満州国財政部総務司長の立場から「日満支ブロック」の形成を提起していたこと、朝鮮経営に関しては宇垣一成からの依頼を受け、農業経済を中心に助言を行っていたことを確認した。また満州国を拠点とした中国の幣制改革について議論を行っていたことを確認した。ここから高橋は、国内の過剰人口を論拠に、日本のアジア諸国への経済的進出と人口流動を正当化する議論を展開していたことが分かった。

この成果は、「天皇主義サンディカリズムとファシズムについて-高橋亀吉の経済思想研究を中心に」として、竹村民郎研究会にて報告した。課題として、こうした革新官僚からの依頼が、高橋が設立した高橋経済研究所の業務の一貫として受けたものなのか、高橋個人の関心として受

けたものなのか、後者であればどこまでが新平価金解禁論やプチ帝国主義論と一貫性をもつ持つものなのかを丁寧に切り分けて議論する必要があることが分かった。これは、高橋の経済理論に潜む排外主義の問題を論じてゆくうえで重要だからである。

(3) 高橋が提起した日本資本主義変革論のうち中小工業の編成内容について、『現代中小商工業論』、『日本工業発展論』などをもとに分析した。その結果、日本工業の段階を、プチ工業国と表現した高橋が、そのプチたる論拠を、日本工業における中小工業の数の多さと低賃金労働の利用に求め、これら特殊な優位性を克服することなくして、今後の日本工業の発展は見込めないと考えていたこと、その具体的な解決策として、国家主導による工業組合の統制と組織の合理化、とくに中小工業金融の設立などを提起したことを明らかにした。またこれらの議論に疑問を呈した有沢広巳の中小工業論批判について、有沢が中小工業を資本主義の発展にしたがい自然消滅するものと考えていたこと、生産力拡充の観点から大工業に重点を置く政策を展開していたことなどを、高橋との違いとして整理した。

この成果は、「有沢広巳と高橋亀吉の「二重構造」理解について」として日本経済思想史学会の研究会にて報告した。またそこでの批判や議論を受けて、「高橋亀吉の日本工業論-「中小工業の優位性論」について」として論文にまとめ、『日本経済思想史研究』(日本経済思想史学会)に発表した。課題として、戦後復興期にて再び提起された高橋の中小工業論が高度成長期にはどのように変遷するのか、また中小工業で生産される工業品が、当時の日本の生産力拡充にどこまで貢献できたのか、などを議論する必要があることが分かった。

(4) 高橋が提起した日本資本主義変革論のうち農業経済の編成内容について、『日本農村経済の研究』、『農村行詰の原因・現状・対策』、『日本農業統制と産業組合』などをもとに分析した。その結果、高橋が日本の農業経済の後進性を、国内向けの米作中心の生産関係および寄生地主制に見られる階級関係などに求めていたこと、小作農を独立自由な農民として解放・育成するために、産業組合・農業組合の設立を要請し、高付加価値をもつ輸出向けの農産物を創出するように提起していたことを明らかにした。ただし、産業組合の自主性だけでは不十分と考えた高橋は、米穀専売制など国家による生産統制も合わせて主張していたことを確認した。

農業組合などの新しい共同体秩序は、総力戦体制の確立過程で再編され、戦災への対応を担ってゆくわけだが、高橋が問題提起した時点では「下からのアソシエーション」の形成に向かう可能性も十分にあったことが分かった。この成果は、「高橋亀吉の産業組合・協同組合論について」として総合人間学会にて報告した。課題として、世界恐慌以降、結果的に農業経済の再編が、組合運動によってではなく、革新官僚主導の経済統制のプログラムのなかで担われてゆく過程を、高橋がどう考えていたのかを検討する必要があることが分かった。

(5) 以上高橋は、日本資本主義の後進性と脆弱性を、歴史的・構造的に分析し指摘する点において、同時代の日本マルクス主義とよく似た議論を展開していたことが分かった。しかしこれまでの研究成果をふまえると、高橋の日本資本主義論は、中小工業と農業経済に典型的な日本資本主義の後進性の解消を、暴力的な社会主義革命によってではなく、資本主義内部からの改変によって可能であると考えた点において、講座派マルクス主義の基本的見解と、しかし、その矛盾は日本資本主義の展開にしたがって自然消滅するものではなく、国家機能を利用した合理的な経済改革によってのみ可能であると考えた点において、労農派マルクス主義の基本的見解と、また日本資本主義の後進性を打開して健全な市場経済を確立するためには、生産統制にまでおよぶ国家の過渡的な経済介入が必要条件であると考えた点において、経済的自由主義の基本的見解と異なることが分かった。

最後に全体の課題として、(2)(4)の内容を論文にまとめることと、上記の議論に加え、戦前の高橋が日本資本主義を変革するためのプログラムとして、日本の証券市場をどのように評価し、改革しようとしていたのかを議論する必要があることが分かった。企業家・実業家、そしてサラリーマンなどの中間層が積極的に証券市場に参画すれば、国民経済を豊かにすることができるだけでなく、市場をつうじて中小工業や農業経済を支える可能性が見いだせるためである。これらは今後の研究に繋げてゆく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 影浦順子	4. 巻 20号
2. 論文標題 高橋亀吉の日本工業論 - 「中小工業の優位性論」について -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本経済思想史研究	6. 最初と最後の頁 60-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 影浦順子
2. 発表標題 高橋亀吉の経済思想
3. 学会等名 経済学史研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 影浦順子
2. 発表標題 高橋亀吉の産業組合・協同組合論について
3. 学会等名 総合人間学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 影浦順子
2. 発表標題 有沢広巳と高橋亀吉の「二重構造」理解について
3. 学会等名 日本経済思想史学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 影浦順子
2. 発表標題 天皇主義サンディカリズムとファシズムについて ~高橋亀吉の經濟思想研究を中心に~
3. 学会等名 竹村民郎研究会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----